おさつで買收した『女客』

永代美知代

『痛快だつたわ、實に痛快極るわ痛快淋漓つてあの事よ』。

某女學校の寮舍に、朝夕をすぐさせ玉ふなる式部の君は、土曜日の午後、保證人の內君を訪ねて、斯う話し出した。そしてその長いメリンス友禪の振を重ねて、つゝましやかに口を蔽ひながら、さも〳〵堪らなささうに笑はせ玉ふ。

『如何したつて云ふんでせうね、痛快の內容は何ですの？』

『ね、痛快だつたわ、賄征伐よ』

『賄征伐？』

『え、さうなの』

『女學生の賄征伐！　大變なのね全く』

『アラ、女學生だつて人間だわ、同じ人間の男學生の方に賄征伐がある以上、女學生だつてして惡いつて法則はありませんでせう、どんな粗食惡食をさせられようと、默つて耐へて、血の氣の無い顏付をしてねて絲のやうな痩せ細つた手をして、はかなげにろうたけく渡らせられるなと、いやに上品ぶつて取澄すやうなのは、もう此節の女學生間には流行しませんわ。第一衞生に毒ですしね え、營養不良で威張つたつて何になるもんですか——』

滔々として、將に衞生美人論を初めさせ玉ふめる御有樣に、內君は早くも、

『えゝえ、それはもう、何と云つても、衞生が大切ですものね、幾ら花のやうな美人だつたとてろで、今にも肺病で死に相なのは、誰だつて嫌ですわ、しんなりと姿の好いのよりあなたのやうに肥つた肩の嚴つい斯うお尻の大きい方が好いつて云ひますね』

『あら、私の肩はそんなに起つて、？』

『さうね、そんなでもないけれど：：お首が短くつて被在やるから、あなたなんぞ大丈夫、氣味の惡いおせ

きの出つてはありませんよ。大丈夫其點の御心配はないでせう』

と云つたが、ふと不興氣な女學生の素振に氣がついて、

『御免なさい、今のはね、あなたが餘り衞生美人をおほめのやうでしたから、つい何の氣もなく申し上げたまでですのよ』

『だつて私の首はそんなに短いでせうか』

『それがあなた、今も申上げた通り、ついその、何ですの、肺病におなりなさるやうな方ではないと云ふのを、確かに申し上げやうと思つて、それでお長くないと申した丈けなのですから惡しからず、ね、肺病でも出やうと云ふ方の御首つきを御覽なさいましな、嫌にひよろ長くつて、全く嫌ぢや御座いませんかねえ』

『さうね』

『まさあか：：幾らお轉婆でもね、私一人じや出來ないわ、寮の方皆なで同盟よ』

『同盟で？　まあ！』

『だつてね、甚いものばかり食べさせるんですもの、幾ら女だからつて、さう〳〵默つて耐へちやゐませんわ、此前の日曜日にね、此家をおいとまして寮へ歸つて行きますとね、突然食堂へ集るやうにつて事ですの』

『先生から？』

『いゝえ生徒の中の一人が大に憤慨して檄を飛ばしたつて譯なのよ西洋紙へ鉛筆で走り書きしたものがちやんと私の机の上に置いてありますの』

（永代靜雄氏とみち代夫人）

いさゝか愁眉を開かせ玉ふ。

『先刻の賄征伐は如何でしたの、あなたお一人で？』

『まあね』

『定めの時間に出掛けると、もうちやんと皆樣が集つて、發起人の津村さんが椅子の上に突立つて、演說するやら罵倒するやら大變よ、それつ！と云ふと皆な大賛成で大活動を初めましたの』

『大活動つて如何？』

『フヽフヽあなたなんかに聞かせたら、屹度驚ろいてお了ひなさるわ、賄のお爺さんだつて、目を剋して呆れてましたわ、フヽフ』

『馬鹿に面白さうですのね』

『えゝえ、皆なで賛成した以上、とうせもう其晩の御飯なんか犠牲にしちまふ決心だわ、だからね、思ひ切つて、焚き立ての温かい御飯の入つたおはちの中へ、さんまの鹽燒だのおこうこだの、お醬油だの、手當り次第食卓の上に載かつてたものを皆な移し込んで、其上からお藥鑵のお湯をざあ〳〵注ぎ込んだのよ、そして、おまけに餘り食堂が騷々しいもんだから覗きに來た賄のお爺さんの見て居る前で、ペッペッとおはちの中へつばを吐きかけてやりましたのお爺さんの呆れ返つた顏つたら無かつたわ、本當にあんな面白い事つてありやしない』

『ホヽホ隨分大變ね、でも後からお腹が空きませんでして？』

『えゝ些少とはねだけども、あの日は恰度日曜で、お宅へあがつて、散〻お壽しだの何だの御馳走になつて歸つたばかりの處でしたから、お蔭で私は何ともなかつてよ』

『でも他の方はお困りでしたでせうね』

『だつて其翌日からもう目に見へて御馳走が違つて來るんですもの、皆な大々的莞爾々々よ』

『どんな御馳走？』

『おさつの甘煮だの、おさつのきんとんだの、おさつの精進揚だの、盛んに私達の機嫌をとつてね毎日御馳走して呉れますの』

『以前はそんな御馳走はしなかつたのですか、おさつ位譯ないでせうにねでは宅でも今日は思ひ切つて御馳走しませう、アノ一寸とお鍋や、角の芋屋迄お使に行つてお出で！』

首へ捕つてお產

『あなた御遠慮には及びません、とうぞお横にお成り遊ばせな』

『本當にもうお苦しいでせうから御自由に』

お炬燵に入つた二人の客は、しきりと主人をいたはつた。

『否、まだそんなに苦しくも御座いませんから、御心配遊ばさないで下さいまし』

『でも最う來月で御座いませう？』

『えゝさうなのですけれど、昨日お產婆さんが被入つて、最う骨盤へ入つてるさうでして、今月中のやうなお話しで御座いましたの』

『オヤまあ、それではもうお苦しい譯ですがねえ、いつそお早くお產になれば好いと思召ますでせう？』

『でもねえ』主人の君はためらひながら、客の一人を顧みた。と、

『だつて怖いやうですわねえ、私、お產は病氣じやない〳〵つてよく聞かされてゐるんですけれど、あの痛みと苦みを思ふとぞつゝ致ますわ』

××の奥樣はいつもお產は輕くて被在やいますの』

『えゝさう、三人持ちましたけれど三度ながら極々輕い方で、末の女の兒なんぞ、おなたお腹が筋張つて、どうやら樣子が變だなと思ひ出して一時間か、それでも一時間半もかゝりましたでせうか、オヤと思ふ間にもう產れて了つて、お產婆さんを迎へて來る間も何も御座いませんでした位ですから、宅ではあなた、お前の產なんか、俺が屁をひる如きものだよなど、惡口を申すんで御座いますよ』

『まあお樂ですわね、私達は却々、ねえ△△の奥樣』

『えゝえ、どうしたつて七八時間は痛みませんぢや、どう　てお產には、なりませんのよ、あなたもさうですのね』

『えゝ、それに私は宅が家に居ませんと、どうしても出ませんのですよ』

『よくさう云つた癖の方があるさうですね、あの何で御座いませう、一番最初、御初產の時、旦那樣がお宅に被入つたのでせう』

『えゝ宅では始終家に居て、都合よく日曜日で御座いませんでも、役所を休んで傍　居て呉れますの』

『お傍へ？』

四十越した××の奥樣は不思議さうに聞き返した。

『えゝ、ちやんと枕元へ附きつきりで座つてねて呉れますのよ、だつてね××の奥樣、私達のお產は昔のやうに座つてねて、炬燵のやぐらに捕つて產むのゝ違つて、じつと横になつたきり、寢てねて產むのですから何かより處が御座いませんぢや、全く頼りなくつて耐へ切れませんの、ね△△の奥樣、あなただつてさうでせう』と△△夫人を顧みた。

『え、ですから私、親戚のものに來て貰つて、じつと其手を握つて產みますの、ですけども旦那樣は男の事で、お產室なんかにお入りなすつた處で大したお役にも立ちますまいにどうなさいますの？』

『否、私はね、宅の首に捕つて產みますの』

おさつで買收された『女客』

××の奥様は勿論、若い同志の△△夫人も流石に呆れたやうな眼と眼を見合はせた。

『だつて宅ではあなた、萬事が西洋風なものですから、自分の妻が死ぬる生きるの苦しい思ひをしてゐる一方、その良人たる者が一人素知らぬ顔をしてゐるなんて、そんな不人情な理窟はない、苦痛を共に頒つてこそ、眞の夫婦だつて、斯う申しましてね、自分から進んで、是非首に捕まるやうにと申すんですもの、ホ、ホ』

若く、美しい夫人は、云ひ譯がましく斯う申述べたが、心持薄赧らんだ其耳の根の美しさ。

『お宅の旦那様は全くおやさしくつてお思ひやりがおあり遊ばしますのね』

『ですけども、そんなに長く、七時間も八時間もお產婦さんに捕まつてられますと、その時はそれで氣が張つてらつしやるから何ですけれど、後から隨分お痛みで御座いませうよホ、ホ』